

2019年度 文学部学外活動応援奨学金

卒業論文作成のための、
平泉周辺での現地調査と資料収集についての報告書

文学部人文社会学科日本史学専攻 四年
16E2122018K

栗山頼子

目次

1. 活動の目的
2. 概要
3. 日程
4. 活動報告
5. 総括

1. 活動の目的

私は卒業論文の題材に岩手県の「平泉」を取り上げ、世界遺産でもある平泉の宗教性にスポットを当てて、都市の範囲で論じたいと考えている。本活動の目的は、奥州藤原三代が築いた浄土の世界を実際に自分の足で巡り、平泉への理解を深めるとともに、卒業論文作成のための資料を収集することである。加えて、地元を愛し、知り尽くしたガイドの方にも案内をお願いし、ガイドブックや独自の調査だけでは知り得ない生の声を論文の参考とする。

また、周辺には、柳之御所遺跡・達谷窟毘沙門堂（平泉町）、骨寺村荘園遺跡（一関市）、白鳥館遺跡・長者ヶ原廃寺（奥州市）など、奥州藤原氏を理解するうえで重要な遺跡が多くあるので、これらもあわせて調査する。初代清衡から始まり、三代で一大都市「平泉」をつくり上げた背景を、関連する遺跡から考察していきたい。未だに県を挙げての発掘調査が続く古都平泉は、実際に足を運び、自らの目で見ることでは得られないことが数多くあると考えられるため、現地で調査を行い、論文の作成に活かす。

2. 概要

中尊寺をはじめとした平泉遺産を見学する

（中尊寺金色堂、白山神社、高館義経堂、無量光院跡、毛越寺、柳之御所遺跡、観自在王院跡、達谷窟毘沙門堂）

地元のガイドの方に平泉周辺の案内をしていただく

資料館を見学する

（平泉文化史館、平泉文化遺産センター、えさし郷土文化館、骨寺村荘園交流館、一関市博物館）

奥州藤原氏ゆかりの地を調査する

（骨寺村荘園遺跡（一関市）、白鳥館遺跡・長者ヶ原廃寺（奥州市））

鎮守社を調査する

（花立廃寺跡、金鶏山、熊野三社、白山妙理堂、北野天神社、稲荷社跡、八坂神社、王子社跡）

3. 日程

2019年9月14日

- 9:45 一ノ関駅到着
- 10:30 骨寺荘園遺跡にてガイドをしていただく
- 13:00 巖美溪、昼食
- 14:00 一関市博物館を見学
- 16:00 達谷窟毘沙門堂
- 17:30 宿到着

2019年9月15日

- 9:00 柳之御所遺跡、無量光院跡、伽羅之御所跡を案内していただく
- 10:00 毛越寺
- 12:00 高館義経堂
- 12:30 長者ヶ原廃寺跡（無料ガイド利用）
- 13:15 白鳥館遺跡
- 14:30 平泉文化史館
- 15:30 鎮守社巡り
- 17:30 宿到着

2019年9月16日

- 9:00 中尊寺
- 11:30 えさし郷土文化館、えさし藤原の郷
- 18:30 東京駅到着

4. 活動報告

1日目

(1) 骨寺村荘園遺跡、交流館【若神子亭】

現在の一関市巖美町本寺地区は、かつて「骨寺村」と呼ばれた荘園である。『吾妻鏡』により村の四方の境が示されており、その範囲が明らか。中尊寺に伝存する古文書や、二枚の『陸奥国骨寺村絵図』に描かれた中世の村の姿を、今でも見ることができる。

12世紀、藤原清衡の発願による『紺紙金銀字交書一切経』の完成に功のあった自在坊蓮光は、そのお経を納める中尊寺経蔵の初代別当に任命された。蓮光は私領であった骨寺村を経蔵に寄進し、骨寺村は清衡から荘園として認められた。以降、骨寺村は経蔵別当領となり、藤原氏滅亡後は、この地方の地頭となった葛西氏との相論を繰り返しながら、15世紀の室町時代まで伝領されていく。この過程で『陸奥国骨寺村絵図』は作成されたと考

えられている。江戸時代になると仙台藩の直轄領となり、本寺と呼ばれるようになる。

私は、「いわいの里ガイドの会」の伊藤明氏に案内をお願いし、骨寺村の絵図を見ながら現地を散策した。絵図に描かれている山並みの裾の道、昔ながらの小区画の水田や地形に沿った曲線のあぜ道を通して国指定の史跡を巡り、絵図の世界を体感した。実際に歩いてみると、水田や屋敷地、堂舎の配置構成が、中世に描かれた絵図と非常に類似していることが分かる。絵図には水田と屋敷がセットで描かれている箇所が数か所あるが、これは中世に田屋敷といわれていたもので、その景観を今でも見ることができた。緩やかに傾斜する自然地形に沿ってつくられた用水路網や、田越しの灌漑が残っており、「荘園として大変優れた土地であり、今でも昔のままの農村景観を保っている」と伊藤氏はおっしゃっていた。

骨寺荘園遺跡内にあるガイダンス施設、若神子亭には、遺跡の歴史と魅力を紹介している展示棟があり、ここでも伊藤氏に解説をしていただけた。上空からの映像を上映していたり、『吾妻鏡』の骨寺村についての記載を見られたりと、さらに理解を深めることができた。毎年年末には、荘園で収穫された作物を中尊寺へ奉納する儀式を再現した『米納め』が行われている。荘園内の駒形根神社から発し、同じく荘園内の慈恵太子拝殿を参拝したのち、中尊寺へ向かう行程で、その様子を映した VTR 等も見ることができた。骨寺荘園遺跡の中世の農村を彷彿させる文化的景観は「生きている文化財」であり、その地では今でも中尊寺との深い歴史的な繋がりを感じることができる。



図1) 自然の地形に沿った昔ながらの小さな田



図2) 灌漑用水路



図3) 遠西遺跡【史跡】



図4) 駒形根神社【史跡】鳥居

(2) 達谷窟

延暦20年(801)、坂上田村麻呂が蝦夷討伐の戦勝記念と仏の加護への感謝を込めて造営したと伝えられている。京都の鞍馬寺から毘沙門天を勧請して百八体の毘沙門天を祀り、国を鎮める祈願所とし窟毘沙門堂(別名を窟堂)と名付けた。達谷窟に関する最古の記録は『吾妻鏡』文治五年(1189)九月廿八日条であり、それ以降『諏訪大明神絵詞』や『田村草子』等の中世文学、また日本国中の社寺縁起にこの窟の名が見える。『公卿補任』に「毘沙門天ノ化身來タリテ我國ヲ護ル」と記されるように、大將軍の本地を毘沙門天と見做す『田村信仰』の発祥地として、国の史跡に指定されている。

毘沙門堂の本尊は寅年守本尊である。御堂の内陣中央の扉の奥には、慈覚大師が大將軍の顔を模して刻まれたと伝えられる秘仏が祀られており、息をのむ迫力であった。毘沙門堂西方には、陸奥守源義家が彫り付けたと伝えられる約十丈にも及ぶ岩面大仏、向かいには巳年守本尊を祀る蝦蟆ヶ池弁天堂、少し奥に進むと酉年守本尊で厄除けの不動明王を祀る姫待不動堂がある。そして一番奥の金堂には、真鏡山上の神木の松で刻まれた薬師如来が祀られている。平泉の中心地からは少し距離があるが、源頼朝が奥州合戦の帰路にわざわざ参詣するほど、みちのくにおいて重要視していたとされる理由を感じることができた。



図5) 達谷西光寺 二之鳥居



図6) 毘沙門堂



図7) 岩面大仏



図8) 蝦蟆ヶ池弁天堂



図9) 姫待不動堂

2日目

(3) 柳之御所遺跡（柳之御所史跡公園）

柳之御所遺跡は藤原氏の政庁と考えられているところで、『吾妻鏡』に記されている「平泉館」と想定されている。多くの建物跡とともに、土器や陶磁器など京都や海外との交流を示す生活遺物が種類・量とも豊富に出土している。遺跡の修復整備が進められており、史跡公園として開放されている。敷地内に遺物の展示や詳しい解説をしていた柳之御所資料館が最近まであったが、規模を大きくするなどの理由で新しくガイダンス施設を建設することになり、今回は残念ながら見学することはかなわなかった。しかし、平泉観光ガイドの方に案内をしていただいたため、十分な知識を得ることができた。

柳之御所遺跡は、いまだに続く発掘調査によって多くの遺構が見つかっている。公園に入りまず目につくのは道路である。道路跡は道路側溝と考えられる2条の溝跡が並行して見つかったもので、復元した道路では、両側に側溝を設けて表示していた。その道路を伽羅之御所跡<(4) 参照>方面に進むと、深い堀につきあたる。遺跡の中心部を囲むように2本見つかり、復元した堀は内側の一部分で、幅が14m、深さが4mあった範囲を表示している。実際に近くに立ってみると想像以上に深く大きく、武家の政庁であったという事実を改めて考えさせられた。

県道を挟んだ逆側の敷地には、園池や掘立柱建物、井戸などの遺構が発掘された。金鶏山を向こうに、中心建物や庭に面して池が見つかり、これは新旧2つの時期があったことが分かっている。復元されている園池は新しい時期のもので、玉石が敷かれ中心には中島がある。導水路が見つかって

いないため、池の水はわき水や雨水などを利用したと考えられている。そしてその周辺には大型の建物が集中している。建物の規模が大きいことや、池や広場に面していることから、平泉館の中心的な施設と考えられる。西の建物は東西約11m、南北約14mの大きさで、広い底をもち、特に格式の高い建物と推定される。東の建物は南北の長さが25mもある長大な建物跡で、この2棟の建物と池、広場などを含めた一帯が儀式やそれに伴う宴会が行われていた空間と考えられている。



図10) 堀



図11) 園地

園池や井戸、汚物廃棄穴などは復元されている一方で建物は一切存在しないが、広大な敷地や道路の幅、そしてこの遺跡の場所から、当時藤原氏にとって非常に重要な場所であったことは容易に想像がつく。ガイドの方によると、発掘調査が始まる前は普通に民家が建ち並んでいたというのだから驚きである。今後多くの人に関心を持ってもらうためにも建物等さらに復元を進めたいそうだが、予算の問題なども多くなかなか厳しいということだ。しかし、ただただ広い敷地を目の前にしてはるか遠い昔に思いを馳せるのも、様々な想像ができて楽しい時間であった。

(4) 伽羅之御所跡

三代秀衡が、柳之御所の南側堀を隔てて新たに居館としてもうけた御所である。「吾妻鏡」には「無量光院の東門に一郭を構え、伽羅と号す。秀衡が常の居所なり。泰衡相継ぎて居所となせり」と記されている。

ガイドの方に案内してもらい現地を訪れると、伽羅之御所入り口を示す案内柱、案内板があるだけで、周囲は民家と畑であった。往時を偲ばせる光景は一切なく、案内板が無ければここに御所があったとは到底思えないような場であった。民家が密集している地域のため大規模な発掘調査を行うことができず、伽羅之御所の詳細はいまだに不明ということである。



図 12) 伽羅之御所があったと考えられている場所

(5) 無量光院跡

秀衡が宇治平等院の鳳凰堂にならい建立した寺院で、広大な敷地内の中心に池があり、その中島に本堂となる阿弥陀堂が建てられていた。遺跡のほとんどが水田化し、池跡、中島、礎石のみが残っている。南北に長い伽藍の中心線は、東門・中島・本堂を貫いてその先の金鷄山と直線で結ばれるよう設計されている。落日の瞬間は非常に幻想的で、平等院の景観とは異なった極楽浄土を体感できるように計算しつくされている。実際に訪れると、建物はなくともその荘厳な空間に圧倒される。日の沈んでいく様子も見たく、夕方にも足を運んだ。現在も史跡の発掘調査および周辺の修復整備が行われ、一帯の景観保全が進められている。



図 13) 無量光院跡 午前の様子



図 14) 無量光院跡 夕方の様子

(6) 毛越寺

二代基衡が造営に着手、三代秀衡の時代にすべての堂塔が完成した。往時には堂塔 40、禅坊 500 の規模を誇り、金堂円隆寺は「吾が朝無双」と称された。当時の堂宇はすべて焼失してしまったが、堂宇や庭園の遺跡は良好な状態で残され、境内の大泉が池は修復整備されて平安時代の作庭造園の形状を今にとどめている。



図 15) 本堂

大泉が池の周りを実際に歩いてみると、この池が海を表現していることが分かる。波打ち際には、築山、州浜、荒磯など海浜の景趣が配されている。順路に沿って進むとまず築山がある。これは州浜、出島と対応の位置にあり、岩山を表現している。州浜は柔らかい曲線で入り江を形作っており、一方で出島・池中立石は荒磯を表現している。特に池中立石は毛越寺庭園を象徴するものである。



図 16) 大泉が池 右端に見えるのが池中立石



図 17) 遣水

(7) 高館義経堂

高館は北上川に面した丘陵で、この一帯は初代清衡の時代から要害地とされていた。兄・頼朝に追われた源義経は、三代秀衡の庇護の下この高館に居館を与えられた。泰衡の急襲に遭い、妻子とともに自害した地でもある。天和三年（1683）、仙台藩主第四代伊達綱村は義経を偲んで丘の頂上に義経堂を建て、中には義経の木像を安置した。弁慶が立ち往生した衣川を望み、眼下に北上川、東稲山が見える高館からの眺望は、平泉随一といえるだろう。



図 18) 高館からの眺め

(8) 長者ヶ原廃寺跡

中尊寺から北に約 1 km の距離に位置する平安時代中期に建てられた寺院の跡で、一辺約 100m の築地塀が方形に巡り、その中に 3 棟の礎石建物が確認されている。造営された年代、整然とした伽藍配置と築地を有することから、この寺院を建立したのは奥州藤原氏の祖先である安倍氏ではないかと考えられている。



図 19) 長者ヶ原廃寺跡

長者ヶ原廃寺跡に隣接された無料ガイドの方によると、以前は安倍氏に関する人物の個人の屋敷跡であろうとされていたようである。しかし、格式の高い寺院にだけ許された区画施設である築地塀の跡が発掘されたことにより、権威と権力を兼ね備えていた人物によって造営された寺院跡であることが分かったそうだ。この遺跡には建物等は一切なく、礎石、塀跡が残るのみであるが、ガイドの方のお話と敷地内に設置されている説明書きによって当時の様子を思い浮かべることができた。驚くことに、頼朝が藤原氏を滅ぼした折立ち寄った際には、すでに寺院は廃れ、礎石すらも草むらに埋もれて見えない状態であったそうだ。



図 20) 本堂跡の礎石

また、この遺跡の価値は二つの側面から評価することができる。一つ目は、長者ヶ原廃

寺が周辺の山を意識して設計・造営されていることである。本堂跡と南門跡の中軸線を南に延長すると、関山で最も標高が高い地点に到達する。本堂跡と南門跡の標高差は1 mあり、本堂から正面を眺望するとき門が視界を遮らないように工夫されている。さらに、本堂の東側には建物が見つかっておらず、築地塀を除けば視界を遮るものはない。西建物跡が東側に建てられなかったのは、東稲山への眺望を確保するためだったと考えられる。この点から、山を意識していたことは明らかであり、同じように山を意識してまちづくりを行った藤原氏に非常に影響を与えていると評価することができる。二つ目は、初代清衡が造営した大長寿院が、長者ヶ原廃寺跡を含む衣川地域への眺望を意識した占地となっていることである。つまり、前九年合戦の激戦地の一つであり、母方の祖先が繁栄した衣川地域からよく見える関山の北側に、十体の阿弥陀像を安置した大長寿院を造営したということは、清衡が浄土思想に基づく平泉を形成するにあたってこの地を重要視していたと考えることができる。

(9) 白鳥館遺跡

平泉の中心部から北東に約5 kmの北上川西岸に位置する遺跡で、北上川の蛇行部に半島状に突き出した丘にある。安倍頼時の八男・白鳥八郎則任の居城と伝えられている。遺跡には堀跡や郭(平場)、土塁など中世城館の痕跡が良く残され、発掘調査によって、10世紀には集落、14世紀～15世紀には城館、16世紀には集落として利用されていたことが分かっている。北上川に周囲を180度以上囲



図 21) 遺跡から西の風景

まれる天然の要害で、特に11世紀から15世紀までの間は、北上川交通の要衝地として機能していた。

遊歩道が整備されていたため、遺跡内を歩いて回ることができた。山道を進みひらけた部分に出ると北上川を見下ろせ、往来する舟の監視に最適な場所であったことがよくわかった。また、白鳥館遺跡から対岸の経塚山の間は、地理的な隘路にあり、北上川の流路が古代から現代まで変動していないようである。安倍氏や藤原氏の時代と変わらぬ景観が今に保たれた貴重な遺跡であった。

(10) 鎮守社

私は卒業論文において、平泉の鎮守社勧請について、その性格と設置時期を考察したいと考えている。そのため、この度の活動の目標の一つが、「寺塔已下注文」（『吾妻鏡』文治五年九月十七日条）にみえる鎮守社を実際に訪ねることであった。「注文」は、中尊寺の南方に日吉社、北方に白山社、毛越寺の東西に惣社、金峯山社が鎮守として存在していたことを述べる。さらに、「鎮守事」という項目を立て、平泉には中央の惣社を核に、東西南北に九つの鎮守社が配置されていたことを記す。鎮守社として確定しているものから、場所すら不確かなものまでであるが、『吾妻鏡』の記述を頼りに巡ってみた。

まず初めに訪れたのは、西方の鎮守社があったとされる花立廃寺跡。ここが金峯山社ではないかと考えられている。金鶏山の東、平泉文化遺産センターに隣接しており、今は芝生の公園になっていた。現在も当時の礎石が27個残っているが、遺跡の保存上その上を盛り土し、新しく石を据えて位置を示していた。この遺跡は、中央に4間×7間（17.4×31.0m）の堂跡があり、その左右に翼廊のつく形式の建物跡である。寺院、惣社跡、館跡など様々推定されているが、藤原氏の時（12世紀）、各地から勧請された神社の惣社の跡とする説が有力である。国の特別史跡「毛越寺境内附鎮守社跡」および史跡「金鶏山」に含まれている。

続いて、道路を挟んで向かい側にある熊野三社。北方鎮守の今熊野社が熊野三社であるとされている。古くはほかの場所にあり、その後花立山、平泉文化遺産センターの地に移され、さらに今位する場所に移された。熊野三社の由緒には、「嘉保年中、奥州藤原三代藤原清衡将軍が平泉鎮護の神として五方鎮守総社を建立された際、當熊野社を平泉北方鎮守の神として熊野社を建立し、五間四面の宮造の社殿で紀伊国より熊野権現の分身を本宮より御分靈賜り守護神として木像を安置しました。」とあるため、鎮守社として勧請されたと考えて間違いないだろう。現在の社殿は、平成二十二年九月に造営されたものである。



図22) 花立廃寺跡



図23) 花立廃寺跡
盛り土と新たに置かれた石



図24) 熊野三社



図25) 鳥居

続いて向かったのは、東方鎮守である白山妙理堂である。「毛越寺口」の交差点を右に曲がって、県道 300 号線を北に 300m ほど進むと堂宇がある。交通量の多い道路からすぐの所にあるが、木々に囲まれており、その場だけ非常に静かな空間であった。現在は白山社の社殿のみがあった。「本尊は十一面観世音菩薩。白山妙理権現をともに祀る。秀衡公の時代から明治初めまでは白山社山王社であり毛越寺・平泉の鎮守のひとつであった。一五七〇年頃焼失。一六七八年二社を合祀し再建。現在の堂宇は、一七六三年建立。境内地を囲む低地は「鈴沢の池」跡で史跡指定地である。」と案内板に記されており、『吾妻鏡』にみえる東方の鎮守社はここであると考えるとよいだろう。



図 26) 白山妙理堂

次は、西方鎮守の二社目、北野天神社。平泉駅を背にして県道 31 号線を進み、毛越寺も通り越して毛越地区に向かう。小道を歩いていくと上り坂が見える。300m ほど登ると山の中に長い階段が見えてくる。かなり急な階段を上がっていくとやっと堂宇がある。非常に分かりにくい場所にあったが、山の入り口に「特別史跡 毛越寺境内附鎮守社跡 北野天神社」との棒がたっていたので、ここで間違いないであろう。案内板などはなく、北野天神社の由緒や現在の堂宇の建立時期など詳しいことは分からなかった。



図 27) 社殿への階段



図 28) 北野天神社

先程の県道 31 号線に戻り、「毛越寺口」の交差点を右に曲がって県道 300 号線を南に約 1 km 進むと、右手に八坂神社が見える。平泉町の祇園地区に位置する。以下は案内板による、八坂神社の由緒である。「当社は平泉の南方に位し、東に束稲山を望み、西に太田川の清流をうけ、広く南方に展開する田園と集落の中に鎮座する。この御社の起源は遠く平安の昔に遡る。今を去る八百五十余年みちのくの地に一代王国を建設して君臨した藤原三代は、初代清衡が鎮護国家の道場として中尊寺を、二代基衡は毛越寺を、三代秀衡は無量光院をそれぞれ建



図 29) 鳥居

立し、豪華絢爛たる黄金の平泉文化を築き上げた。吾妻鏡によれば、当時平泉の五方鎮守の神として、中央に惣社を、東に日吉白山、南に祇園社王子諸社、西に北野天神金峯山、北に今熊野稲荷などの社を祀ったと記されており、当社は記事中の「祇園社」にあたっている。当社の鎮座様式等に関しては「平泉寺塔已下注文」中の鎮守事の一節に「悉以摸本社之儀」とあり、又「年中恒例法会」の中には、六月に「祇園会」が盛大に催されたと記されてある。当時疫病退散の神として京の都において特に信仰のあつかった祇園社を勧請して遷座されたものである。境内は綺麗にされており、今でも地域の人々に大切にされていることが窺える。江戸時代までは「祇園宮」と称したが、明治維新の改革に伴い、明治八年四月に八坂神社と改称し村社に列せられたという。八坂神社は南方鎮守の祇園社と考えると間違いないだろう。



図 29) 八坂神社

そして、県道 300 号線を挟んで向かい側のほそい路地には、王子社跡がある。ここがかつての南方鎮守、王子諸社である。現在は小さな祠が二つ残っているだけで、建物は一切ないが、祠のひとつには木製の神像が祀られていた。祠の横に彫られた文字を読み解きたかったが、残念ながらほとんど薄れてしまっており、いつ置かれたものかはわからなかった。しかし、王子諸社の場所を確認することができたためよしとする。



図 30) 王子社跡

北方鎮守のひとつである稲荷社、そして惣社は、未だにどこにあったのか特定されていない。関係のありそうな場所に足を運んでみたが、これといった成果はなかった。だが、実際に自分の足で鎮守社を巡ることで、各鎮守社の位置関係など気になる点をいくつか発見することができた。この度の調査で得た情報に加えて、『吾妻鏡』や、近世に記された平泉の地誌を参考にし、研究を進めていきたい。

3 日目

(12) 中尊寺

平泉文化のなかで一番有名であろう中尊寺は、嘉祥三年（850）慈覚大師円仁が開山した。その 250 年ほど後、藤原清衡が江刺豊田館より本拠を移し、多くの堂塔を造営した。奥州藤原氏滅亡後、仏堂の多くが焼失したが、金色堂、経蔵、金色堂覆堂など 6 件の国宝・重要文化財が良好な状態で保存されている。中尊寺には以前訪れたことがあるが、本活動

では平泉に関する知識を多く入れて見学したため、見える景色が前回とは異なった。

やはり圧巻であったのは国宝にも指定されている金色堂である。本尊は阿弥陀如来、脇侍に観音・勢至菩薩、さらに六体の地藏菩薩と持国天・増長天が本尊を取り巻いている。堂全体は金箔で覆われ、内陣は螺鈿細工・蒔絵などの漆工芸や精緻な彫金で荘厳されており、見る者を圧倒する。中央の須弥壇の内に初代清衡、向かって左の壇に二代基衡、右の壇に三代秀衡の遺体と四代泰衡の首級が納められている。須弥壇のデザインや大きさが少しずつ異なっていたのが印象的であった。また、金色堂のすぐ隣にある讚衡蔵も非常に見応えがあった。讚衡蔵とは、奥州藤原氏が残した三千点をこえる貴重な国宝・文化財を収蔵している宝物館である。かつて本堂の本尊であった阿弥陀如来坐像や、「金銀字交書一切経」をはじめとする経の数々、藤原氏の副葬品など、中尊寺、そして平泉を語るうえで外せない貴重な品々を拝観することができた。



図 31) 白山神社 能舞台

境内の北奥に進んでいくと、中尊寺の鎮守社として勧請された白山神社がある。まず見えてきたのは、立派な能舞台。江戸時代末期の火災で焼失したため、現在ある能舞台は伊達藩主伊達慶邦によって寄進、再建されたものである。国の重要文化財に指定されている。そして一番奥にあるのが白山神社の社殿である。中尊寺入り口から月見坂をのぼり、ここまで来るのに結構な時間がかかった。端から端まで自分の足で歩いてみることで、中尊寺の広さを改めて実感することができた。

(13) えさし郷土文化館、えさし藤原の郷

平泉からさらに北へ足を延ばし、藤原清衡とその父・経清のゆかりの地である奥州市江刺区に向かった。平安時代の仏教美術や江刺の歴史を学ぶことができる「えさし郷土文化館」と、平安時代の歴史テーマパーク「歴史公園えさし藤原の郷」を見学した。当初はえさし郷土文化館だけの予定であったが、せっかくの機会と思い藤原の郷もまわった。

えさし郷土文化館では、平安時代初期からこの地方で信仰された貴重な仏教文化財を展示・紹介していた。国宝の中尊寺経二種に加え、国



図 32) えさし藤原の郷 清衡館

指定・重要文化財の仏像も多く展示され、見ごたえ十分な内容であった。隣接するえさし藤原の郷は、約 20 ヘクタールの敷地に、平安貴族の住宅、寝殿造の建物を再現した「伽羅御所」や、武家館を再現した「経清館」、「清衡館」、政治を司る「政庁」など、大小約 120 棟の建物が建てられており、想像以上の規模であった。誌面や映像で再現イメージを見ることはあるが、自分が建物の中に入るのはもちろん初めてであり、思わず楽しんでしまった。みちのくの地にこれほど立派な建物が建ち並んでいた光景は、さぞかし壮観だったであろう。

5. 総括

天候にも恵まれ、当初の計画通り順調に調査を進めることができた。ガイドの方々も非常に親切で、大変盛りだくさんの内容となった。特に実りがあったのは、初日の骨寺荘園遺跡、二日目の長者ヶ原廃寺跡といった、平泉の中心地から少し離れた場所における藤原氏の文化遺産についてと、やはり鎮守社に関する調査である。

世界遺産に登録されている遺跡については多くの情報があり、議論も活発になされている。しかし、それ以外は未だに分かっていないことも多く文献も少ない。そんな中、実際に自分の目で見て、地元の方の話を直接聞いたことは、卒業論文を作成するにあたって極めて意義のあるものであった。今回の現地調査によって、有益な情報を収集し、卒業論文の論点をさらに絞ることができた。今後は、文献史料と併せて奥州藤原氏、都市平泉について迫っていきたいと考える。